

第一次世界大戦と D. H. ロレンス¹⁾

——資金繰りの日々

佐藤 治夫

D. H. Lawrence and WWI

—— Days of debts and tears

Haruo Sato

Abstract

The economical condition of D. H. Lawrence is analysed, with special reference to his income. The author for the first time clarified the two main bodies of his income—donations (sometimes equals to personal debts) from his friends and admirers, together with the royalties from the publishers. A new fact was also discovered that J. B. Pinker, the publisher, played an important role in helping the Lawrences economically during the First World War.

Key words : D. H. Lawrence, WWI, Pinker, royalties, income

英国参戦

David Hubert Lawrence (1885-1930) の生涯のうちで、最も金銭的に辛かった時期が、第一次世界大戦の開始から終了までであった。フリーダ・ウィークリーとの駆け落ちから始まった、ロレンスの悪夢のような時期であった。当時の一般の英国人が高を括っていた、ヨーロッパ大陸での対ドイツ戦がよもや自分の身に及ぶとは本人も考えていなかった。1914年6月24日²⁾にフリーダとの結婚のために帰英し、Gordon Campbell 邸(9 Selwood Terrace, South Kensington, S. W. 発信の書簡)に8月半ばまで滞在しているが、その間に、6月28日の第一次世界大戦勃発を迎えてしまった時に、後に‘the ultra-simple life’と Pinker への書簡(#778)にて自ら描いた生活が始まったのである。

7月13日にフリーダと Kensington Register Office で結婚をしたロレンス夫妻は、英国にての小説家・詩人 D. H. ロレンスとしての名声を夢見てそのまま滞在することになった。しかし、この後の彼の人生を象徴するかのようになり、結婚してすぐの7月下旬には

書簡番号³⁾763 J. B. Pinker 宛 23 July 1914

Did you exchange the agreements with Methuen, and did he give you the cheque for me? I wish he would, for I am again at my last pennies...

とメッシュエン社からの Wedding Ring 分印税税前渡し金(100ポンド)を確認させ、所持金が底を突いたとすでに窮状を訴えている。

7月末に、身過ぎ世過ぎのために(?)書いた

旅行記ものを仕上げ、湖水地方に旅行に出るが、8月5日に Barrow in Furness に到着したロレンスは、駅が出征兵士であふれているのを知る。英国は、グリニッジ標準時の8月4日午後11時に、フリーダの祖国ドイツと交戦状態に入っていた。生涯の友としても交友のあるコテリアンスキーへの同日付の葉書

書簡番号 772 S. S. Koteliensky 宛 5 August 1914

...I am very miserable about the war.

を妻フリーダの母国語であるドイツ語で‘auf wiedersehen’³⁾と結んでいることは、ロレンス夫妻の置かれた不安定な将来を予感させるものである。

戦時下の英国に「閉じ込められて」

ロレンス夫妻の持つ弱点は、妻フリーダが今や「敵性外国人」となったこと、またドイツのものへのロレンス自身の思い入れである。書簡の検閲下では当然ながら、親独派であることは容易に分かってしまう。ドイツの「スパイ」に関する取り締まりは当然ながら行われており、ロレンスの出版代理人であるガーネットが、結婚直後の、ロレンス夫妻を食事に招いた後で、帰りにドイツ語で別れの挨拶を交わしただけで、近所の住人の通報により、ガーネット家に合計3回延べ5名の警官が調査に来た⁴⁾ほど、「スパイ」には神経を尖らせていたのであるから、敵性外国人を妻に持つロレンスの扱いは、想像に難くない。当然のことながら、夫妻ともども国外に出ようとするが、戦時下として思うようにはならず⁵⁾に断念せざるを得ず、逆に徴兵検査という屈辱的な体験⁶⁾をすることになる。翌1915年、5月に英国船籍の客船ルシタニア号がドイツ軍に撃沈されると、さらに英国内で反独感情が高まった。妻フリーダの結婚前

の姓が、フリーダ・フォン・リヒトホーフェン、つまり有名な撃墜王「レッド・バロン」の血縁者であるので、当時英国籍のドイツ人約8000人の中でも、特に警戒されたであろう。

戦時色の染まった英国での、ロレンスの小説出版は思うに任せず、かつ『虹』のように内容が出版社メッシュエンの意向に沿わず、契約料のみで印税が入らないなどの場合もあり、次第にロレンス家の収支を追い詰めてゆくのである。

困窮のロレンス家

ロレンス夫妻の開戦直前の婦英は、物価の安いイタリアなら暮らしが成り立つ前提で、結婚と出版に関する処理を行うだけの予定であったろうが、大戦勃発により、英国から出られない状態となったものである。事実、英国の卸売物価指数は開戦の1914年に比べると、1917年では2倍になっており、収入の道が殆どなくなったロレンス家ならずとも大戦中の家計のやり繰りは大変だったのである。

転居の連続

家計費の中に占める割合が多いのは、土地や家屋の賃借費であるのは、いつでも都市生活者の宿命である。開戦当初に身を寄せていた知人宅に、そういつまでも留まれるわけもなく、開戦から間もなく、The Triangle, Bellingdon Lane, Nr. Chesham, Bucks. に引越す。家賃は週6シリングであったので、年額を55週間とすると)16ポンドと10シリングであり、当時の標準的な賃貸物件としては、安ものの住居と言わざるを得ない。ロレンスは、1914年7月23日に上記の書簡番号763にてピンカーに窮状を訴えているが、次にロレンスがピンカーに窮状を訴えた1915年4月23日までの9ヶ月間の家賃は10ポンド16シリングとなるところだが、1915年1月23日にGreatham, Pulborough, Sussexの家をヴァイオラ・メネルから無料で借りると

うか、再び居候が可能になったので、7ポンド4シリングの出費で済んでいる。

第一次大戦中最も長期に亘って住んだのは、渡米のため一時的に居を構えた1, Byron Villas, Vale-of-Health, Hampstead, London を解約してしまい、かつ渡米が叶わなかったために1915年12月30日に引越したコーンウォールのPorthcothan(家賃は年5ポンド 書簡番号1196)であった。大変気に入っていたこの住居も、戦況の悪化にともなう外国人対策の強化にともなう措置がとられた。1917年10月11日に、10月15日までにコーンウォール退去ならびに海岸地帯と主要な港湾への立ち入りの禁止を命じられ、ロンドンに逃れた(書簡番号1463)。多分、徴兵検査と相俟って、戦争と英国に対するロレンスの印象を決定付けた事件であろう。

この後は、パークシャーのChapel Farm Cottage, Hermitage, nr Newbury. に1917年12月18日移るが、最終的には、見かねた妹が家賃の年額65ポンドを支払ってくれ、ダービーシャーのMountain Cottage, Middleton by Wirksworth に1918年5月2日引越している。これでやっとしばらくは家賃の心配からは解放されて著述に励めることになった。

ピンカーの援助

不思議なことに、戦時中の英国に閉じ込められたロレンスが窮状を訴えるのはピンカーであった。友人・知人に直接金の無心をすることは誰でもためらいがあるものであろう。実際には、ピンカーに宛てて、

1914年7月23日(書簡番号763)

1915年4月23日(書簡番号906)

1918年2月16日(書簡番号1522)

と、ロレンスの手元に金が集まり始めた1917年を除いて、不定期ではあるが金の無心をしている。毎回ピンカーが自分の懐から金を送っていたわけではなさそうであるが、好意的にあち

こちから前借や既に出版されていた分に対する原稿料の早期の徴収、などを実現してロレンスに送ってくれたのも確かである。第一次世界大戦の間に、ピンカー経由でロレンスの手元に入った金額は、実に400ポンドに及んでいる。ロレンス夫妻が飢えを凌げたのは、善意の友人知人たちからの援助もあったが、実際には、主に「書きまくった」小説家・詩人ロレンスと、金を集めまくってくれたピンカーの二人の努力によるものであり、従来信じられているように、友人知人の援助に「縋って」戦時下を切り抜けたわけではないのである。

ロレンスの収入

ロレンス書簡に現れた、借金ならびに友人からの寄贈(後日金回りの良くなった時代に返していることもあるので借金と考えたほうが良い場合も多い)をまとめてみると、以下の一覧となる。(日付はロレンス書簡中で借金に触れている日付)

1914年6月?	メシュエン社からの100ポンド(以下の計算には入らない)
1914年8月25日	ジョージ朝詞華集第一巻増刷分10ポンド?
1914年9月13日	マーシュから10ポンド贈られる
1914年9月10日	ストロウからの前渡し金10ポンド
1914年10月5日	ピンカーから17ポンド
1914年10月13日	ピンカーから25ポンド
1914年10月21日	王立文学基金から50ポンド贈られる
1915年1月13日	ピンカーから5ポンド
1915年1月13日	ピンカーから25ポンド
1915年7月12日	ピンカーから42ポンド10シリング
1915年7月17日	ピンカーから90ポンド

1915年10月5日 ピンカーから33ポンド
1915年11月10日 マーシュから20ポンド贈られる
1915年11月18日 オットリーヌから30ポンド贈られる
1915年11月22日 バーナード・ショーから5ポンド(詳細不明)
1915年11月30日 ピンカーから40ポンド
1915年12月29日 バートランド・ラッセルから2ポンド(詳細不明)
1916年3月6日 マーシュから2ポンド2シリング6ペンス
1916年7月13日 ピンカーから50ポンド
1916年8月23日 ロウエルから8ポンド
1916年10月17日 マーシュから4ポンド贈られる
1916年11月14日 ロウエルから60ポンド
1916年11月17日 ピンカーから50ポンド
1917年7月26日 マーシュから7ポンド15シリング
1917年9月22日 ピンカーから13ポンド10シリング
1918年2月21日 コテリアンスキーから10ポンド贈られる
1918年2月21日 シャーマンから10ポンド贈られる
1918年2月22日 ピンカーから原稿料9ギニー(=9ポンド9シリング)
1918年2月22日 シンシア・スキスから5ポンド贈られる
1918年4月28日 妹エイダが新居の家賃65ポンドを払う
1918年5月2日 妹エイダから20ポンドを贈られる
1918年7月12日 王立文学基金から50ポンド贈られる

(1918年11月11日 第一次大戦終結)

上記の一覧を年度単位で合計してみると、

1914年開戦からの分 122ポンド
1915年 292ポンド10シリング
1916年 174ポンド2シリング6ペンス
1917年 21ポンド5シリング
1918年終戦まで分 104ポンド
合計 713ポンド17シリング6ペンス⁷⁾

この金額だと、書簡番号1251 J. B. Pinker宛 30 June 1916でピンカーに伝えている状況。

I can manage on about £150 a year, here.
が、単にピンカーに窮状を訴えるためだけでなく、
実際の生活実感なのであろうか。

ロレンス家の生活費

一般論として、都市部で暮らす英国紳士が召使の一人も使って暮らすには300ポンドが必要とされていた時代に、コーンウォールで家賃年額5ポンドの家に暮らしていたロレンス夫妻には、十分な額であったのかもしれない。月に換算して12ポンド程度の金額で十分だったのであろう。

どうしても一点だけ、多額の支払いが必要だったのは、フリーダの離婚訴訟終了後に、弁護士から請求された150ポンド程度の弁護士費用であった。この「トラブル」の初めは、開戦直後の1914年10月下旬の書簡に現れる。

書簡番号799 Catherine Jackson宛 21 October 1914

...The Literary Fund gave me £50. I have got about £70 in the world now.

Of this I owe £145 to the divorce lawyers, for costs claimed against me. This I am never going to pay. I also owe about £20 otherwise. So I've got some £50....

この書簡中で、ロレンスはこの時点で 50 ポンドを所持していたことになり、弁護士費用を払うことは望むべくも無く、相手方がロレンスに未払いのままのメシュエン社からの 150 ポンドを差し押さえないように、「あがく」ロレンスがいたのだが、注目すべきは、7月23日の段階でピンカーに縋ろうとしたロレンスが、上記の一覧からすると 122 ポンド収入があったはずなので、7月23日時点での所持金(不明)と合算しても、10月21日の時点で 70 ポンド以上を使っていることである。8月にバッキンガムシャーに引越したときの費用にしてはかかりすぎていて、今後の研究に俟つ部分である。また、文中の 'I also owe about £20 otherwise.' も、現在のところ説明のつかない部分である。書簡研究ではなかなか発掘できない、実際のロレンスと周囲の人々との交流のなかから、何らかの形でロレンスが、借りるか援助かを受けている可能性を、この「他にも 20 ポンド借りがあるので。」は示唆している。

とにかく 50 ポンドあれば 1914 年は無事に過ごせたはずであり、翌年早々のピンカーからの送金金額 30 ポンドと合計すると、10月21日から翌 1915 年の 4月23日にピンカーへ経済的困窮の手紙を書くまでの間の約半年間は、約 80 ポンドで過ごしたことになり、1年間を 150 ポンドで過ごせるというロレンスの言葉は、かなり真実に近いものと思われる。年間の生活費 1 年分を弁護士から請求されたロレンスが、逆上したかのごとく絶対不払いを早々と宣言したわけも納得できるものである。

むすび

以上のごとく、ロレンスの書簡を使って、不幸にも戦時下の英国に「閉じ込められた」ロレンス夫妻の、生活費の遣り繰りを示す記録を一部発掘出来たのである。作家ロレンスの名誉のために付け加えるのだが、実際にはすべての友

人知人からの援助を受けたわけではなく、例えば SS コテリアンスキーが貧窮している中から申し出た 10 ポンドの贈呈を断っており、困っている相手には、乏しい所持金の中から、自分が受け取った額(時にはそれ以上)以上に送金したようである。このように、周囲の者に対する細やかな気遣いがロレンスの特質の一部であり、また、この「細かい」部分の解明については、未着手の Memorandum の解明を俟たねばならない。

注

- (1) 本研究は、日本大学歯学部佐藤研究費の援助を受けての研究である。また研究成果は、著者の所属する D.H.ロレンス書簡研究グループ(研究代表者：須田理恵——日本大学、相良英明——鶴見大学、市川 仁——中央学院大学)の研究の一部を構成し、同グループの資料を一部使用している。
- (2) 本文中の日付は、Peter Preston, *A D.H.Lawrence Chronology*, Macmillan, 1994 に拠る。
- (3) 本文は *Letters of D.H.Lawrence*, Cambridge U. P., 1987-1993 VOLS.1-7 に拠っており、書簡番号は同シリーズの書簡集に拠る。
- (4) Edward Nehls, *D.H.Lawrence: a composite biography*, Wisconsin UP 1957 vol.1 p 241
- (5) 佐藤治夫「D.H.ロレンスの国外脱出」日本大学歯学部紀要第 26 号 1999
- (6) 書簡番号 1089 に延べられている 'it makes me angry also to be stripped naked before two recruiting sergeants, and examined.' 屈辱的な体験はしたが、健康上の理由からの兵役免除を受けている(書簡番号 1257 9 July 1916)。
- (7) 合計には、1918 年 4 月の妹エイダからの家賃 65 ポンド分は、お金としてロレンスに渡したのではなく、家主に直接支払われているので含まれていない。また、開戦前であるし、開戦前にすでに使い果たしていたのが明白であるので、前渡し金としてメシュエン社からの 100 ポンドも計算には含まれていない。